

回遊性種飼付け実用化事業（シマアジ）（要約）

島田和彦・海老沢明彦

1. 目的

シマアジ放流魚のより効果的な回収を目的に飼付けの管理技術の開発調査等（種苗輸送、中間育成、飼付け、追跡）を渡嘉敷島で行った。なお、結果の詳細については「平成9年度回遊性種飼付け実用化事業報告書」として別途印刷されているので、ここでは要約のみを示す。

2. 内容

(1) 種苗輸送

本年度の種苗輸送は、4月24日に約34mm（FL）のシマアジ41,000尾を上浦事業場から沖縄県渡嘉敷島まで、水試調査船（171t）の活魚槽（約7t×3面）を用いて行った。

収容密度は、1,230g/tであり、輸送時間は約45時間であったが、その間ほとんどへい死は見られなかった。しかし現場でのイクス曳航に伴うへい死が2,000尾程度生じた。

(2) 中間育成

中間育成は4月26日から11月14日まで渡嘉志久湾で行った。その結果11月初旬までは、ほとんどへい死もなく順調に成育したが、11月8日頃からへい死（20～30尾/日）が出始めた。そのためイクス下層での給餌馴致を行わず11月14日～16日にかけて、約30,000尾を放流した。

へい死の原因はイリドウイルスによるものと推定された。中間育成終了サイズは、台風等の影響で遅れたため、約14cm（FL）と計画の12cmよりかなり大型となった。

(3) 種苗放流及び飼付け試験

今年度の飼付け試験も基本的にこれまでと同様な方法で行い、飼付け状態の再現性の確認を試みたが失敗に終わった。昨年度との主な相違点は以下のとおりである。

①放流魚の数が多かった。（例年の2～3倍）

②飼付け用のイクスを2基にし、外敵防御網もその分大きくした。

③イクスの移動及び現地馴致を行わなかった。

④イクス下層での給餌馴致を行わなかった。

使用した放流基盤は昨年度と同様の2段網と新たに追加した1段網及び周囲の害敵防御網とした。放流は、イクス底面を切り開く方法で行った。放流後の給餌は、朝昼夕の3回イクス底面近くで給餌した。また、海底馴致の代わりに、ダイバーによる海底摂餌誘導を行った。

今年度の放流魚の挙動及び周囲の状況は、昨年と著しく異なり（サメ出現、防御網の効果等）、最終的には1ヶ月半後に全てのシマアジが逸散した。そのため海底放流手法の適否は判断できなかったが、かなりの困難性が新たに増大した。

(4) 追跡調査

1) 再捕状況等

・5年度以前の放流群

4年若しくは5年度放流群と思われる6個体（FL48～61cm）が、沖縄本島北部の東及び西側海域で漁獲された。

・6年度及び7年度放流群

再捕報告はなかった。

・8年度放流群

放流海域から約40Km離れた本島南部西側海域から5尾（FL26～29cm）、また約4Km離れた座間味島から1尾（FL約25cm）が捕獲された。

・9年度放流群

放流場所と同じ渡嘉志久湾から1尾（FL17cm）が捕獲された。また、放流及び周辺海域に出没するサメにシマアジが数十尾付いていたとの情報や座間味島での10尾程度の群の確認があった。

本海域において4年間継続的に事業を実施してき

たが、サメやウイルスの出現と当初から予想もしていなかった状況になる一方、漁業による再捕が極端に少ないという状況等も勘案すると、当該事業の展開は困難であると思われた。